J・J・ジョンソン編『ラテン・アメリカにおける持続と変化』

John J. Johnson ed., *Continuity and Change in Latin America*, Stanford University Press, 1964, xiii+282 p.

I

American Council of Learned Societies and Social Science Research Council によって設立された Joint Committee on Latin American Studies の提唱で，1963年に Johnson 教授を中心に開催された会議 Continuity and Change in Latin America の成果が本書である。Johnson は Stanford 大学の歴史学教授で著書に *Political Change in Latin America: The Emergence of the Middle Sectors* (1958) がある。かれは序章で本書の基本的な立場と認識をつぎのように述べている。

第2次大戦この方ラテン・アメリカはたえまない変化の過程にあり，伝統的な社会構造は崩壊して政治経済の中心は地方のアシエンダから都市へと移りつつある。しかし変化への動きはいたるところで抑制力とぶつかる。すなわち今日のラテン・アメリカでは変化と停滞とが常に闘争状態にある。そして社会の発展を促進あるいは阻害する力として制度でなくて人間が，それも個人よりも集団としての人間が決定的に重要であるとみてその分析を行なう。この線に沿って本書の第1章から第8章まではこれらの人間集団をおのおのの専門家が論じている。本書の構成は，序章，第1章「農民」，第2章「地方の労働者」，第3章「作家」，第4章「芸術家」，第5章「軍隊」，第6章「産業資本家」，第7章「都市労働者」，第8章「大学生」，第9章「ラテン・アメリカと日本の比較」である。

II

第1章「農民」を受けもつ Charles Wagley は人類学者で Columbia 大学の Institute of Latin American Studies の Director である。著書に *An Introduction to Brazil* (1963) 等がある。ここでいう農民とは自ら土地を管理し生計の手段として農業を営む者という意味である。この部門に関しては人類学者のコミュニティー・スタディーを中心として最も研究が進んでいるが，一口に農民といっても非常に範囲が広い。かれはこれをインディオ農民とメスティーソ農民という二つの subtypes に分類し，おのおののモデルケースとして二つのコミュニティーを分析することによって農民社会の変化をとらえている。インディオ農民の例としてはグアテマラ北西部のマヤ語を話すコミュニティー Santiago Chimaltenango をとりあげる。そこでは人口増加と土地の狭隘化により多くの住民がコーヒー園や都市に流出し，同時に土地を外来者に売ることによりコミュニティー内へ異分子がはいってくる。その結果多くの人間が新しい社会経済体制のもとにはいり，また外来者によってコミュニティー内の共同体的同質性は失われていく。この過程は終局的にはインディオ農民というものがラテン・アメリカ社会から消滅するところまで進むであろうと Wagley は言う。メスティーソ農民の例としてはブラジルのアマゾン下流域にある町 Itá（仮名）をとりあげる。Itá には二つの社会階層，ホワイト・カラーの上層と農民を中心とする下層がある。このような内部の階層分化にかかわらず Itá 社会としての連帯感をもっている。Itá の農民は非農民と離れた独自のコミュニティーを形成するのではない。かれらは特定の商人を通じて農産物を売り生活必需品を買うがこれらの商人と債務関係によって結びつくことが多く，またこれらを patrão（パトロン）に持つ。

以上ラテン・アメリカの農民の二つのタイプについておのおののコミュニティーと外部社会との関係において考察がなされた。インディオ農民は一般的にいって保守的であり「変化」に対して抵抗の姿勢を示すにもかかわらず，かれらが人口の大部分を占める高地ラテン・アメリカ諸国においてインディオのメスティーソ化現象，プランテーション労働者，都市の下層民と化する傾向がみられる。やがてラテン・アメリカの社会はインディオとメスティーソといった2分的な社会でなくなり，すべての人々が国民としての自覚をもつようになるであろうと結論する。

農民と最も近い関係にあるもので次に考察の対象とされるのが「地方の労働者」である。この章を担当する Richard N. Adams は Texas 大学の人類学教授であり，*A Community in the Andes* (1959) 等の著書がある。地方の労働者といっても農民の一時的な賃労働から農業労働者，アシエンダのコロノあるいは賦役労働，鉱業や林業に従事する者，地方の工業労働者まで範囲は広いが，Adams はこれらの労働者の生活と行動を支配する主たる団体との関係において考察する。これらの団体とはあ

る場合にはアシエンダであり，あるいは政府，地方自治体であり，また労働組合，農民協同組合である。地方の労働者にとって基本的な動向は地方から都市への移動である。土地に対する人口圧力の増大から農民が賃労働者化する傾向が目だち，地方の賃労働者の増大は都市への移動を唯一の解決策として求める。

つぎに「都市労働者」が問題とされねばならないが第7章がそれを扱っている。Frank Bonilla は Massachusetts Institute of Technology の経済社会学部の助教授であり，また MIT の Center for International Studies の主任研究員である。近年のラテン・アメリカの諸「変化」の中でも人口の都市集中ほど著しい現象はない。しかしながら都市化の程度と経済発展，工業化その他一般に近代化といわれるものとは一応きり離して考えるべきである。ラテン・アメリカにおいては最近の都市への人口集中は工業化をはるかに凌ぐ速度で行なわれた。その結果地方の文化要素が都市へ流入し，都市の膨張に伴う非都市化現象が起こる。都市化に伴う社会変化として一般的にいえることは，政治経済の実権が土地所有に基づく少数者のもとから都市の中産階級，労働者階級の手に移りつつあることおよび組織労働力の成長である。

「作家」を担当する Fred P. Ellison はロマンス系語学の専攻で Texas 大学の Area Center for Latin American Studies の Director である。著書に *Brazil's New Novel: Four Northeastern Masters* (1954) がある。ここで問題とされるのは作家の個々の作品や創作活動そのものでなく作家の社会的地位，政治上の役割などである。19世紀においては職業的な作家というものは少なく，文筆活動は政治家，ジャーナリスト等のいわば片手間の仕事であった。文学は上流あるいは中流上層の独占物であった。それが今世紀にはいり教育とマスコミの普及に伴って一定の読者層をもつようになると職業作家が存在する社会的基盤ができた。同時に作家の社会的影響力や作家と政治権力の関係が問題となってくる。一般的にいって第2次大戦後の作家は政治的には中道左派の路線であり，社会的に「変化」の唱道者であるといえる。

「芸術家」の章を担当する Gilbert Chase は Tulane 大学の音楽およびラテン・アメリカ研究の教授であり，リマ，ブエノスアイレス等のアメリカ大使館文化担当官を歴任した。ここで扱う芸術家は音楽，絵画，彫刻，建築を職業とする者であるが，芸術家の芸術活動，社会的影響力と本書のテーマ「持続と変化」の関係という観点からみるとき，著者のメキシコ絵画の動きに関する考察はきわめて興味深い。メキシコ革命後の Obregón 政権（1920～24）下で政府は革命の成果を定着させるために政治，経済，文化の再建を唱えた。政府は芸術のパトロンの役割を担った。リベラ (Diego Rivera) とシケイロス (David Siqueiros) の両壁画家が中心となって労働者，画家，彫刻家組合（シンジカート）をつくり，芸術における集産主義を唱えてブルジョア個人主義を排した。シンジカートは声明を発し，創造的な芸術家は社会経済的地位において労働者となんら変わらないとして少数エリートの芸術という伝統から離れた。この立場はいうまでもなく「変化」を唱道するものである。

しかしながらこれらメキシコの壁画家たちは芸術における近代化の力となりうるだろうか。芸術を革命の目的と一致させようとしたかれらの意図は，社会的，政治的，経済的な「変化」への指向をもっていたが，芸術における真の近代化への原動力はむしろ非政治的な画家たちの中に求められる。国際主義の立場に立ち現代芸術への関心を呼びさまそうとしたグループ Los Contemporáneos がそれであり，その代表者タマヨ (Rufino Tamayo) は1940年以後のメキシコ画壇の最重要人物である。Chase はこれを総括して，芸術活動において非美的要素が美的要素にまさるようになるとしだいにその芸術としての価値ばかりでなく社会的伝達者としての効力をも失うと説明している。20世紀絵画の新しい波はメキシコを通じてではなくアルゼンチン，ブラジル，キューバを通じてラテン・アメリカにはいった。メキシコ市とブエノスアイレスは絵画における2大中心地であるが，メキシコ市に代表されるのは社会—政治的，民族—地理的要素をもとにしたナショナリズムへの指向でインディオの多い諸国への影響が強く，これと対照的にブエノスは国際的なモダニズムの代表である。

「産業資本家」の章を担当する W. Paul Strassmann は Michigan 州立大学の経済学教授で *Risk and Technological Innovation* (1959) の著書がある。かれによればラテン・アメリカの産業資本家の特徴は一口でいえば家族中心主義であり，家の社会的地位と威信の確立，維持が主たる関心で財産の拡大は2次的である。立派な企業王国をつくろうという欲望は比較的弱く，社会の進歩，技術革新，民主主義その他抽象的なことがらに対する関心はさらに薄い。社会福祉への奉仕も自分自身の雇用者に対する温情主義的庇護の範囲を越えるものではない。産業資本家が社会の近代化，工業化にとって前向きの姿勢をとることはもちろんであるが，産業資本家であ

ることが機会の不均等，家格，財産その他の特権に多く負っているかぎり，それは封建的な過去の「持続」の象徴たりうる。「軍隊」を扱っている Lyle N. McAlister は Florida 大学 Center for Latin American Studies の Director で歴史学者である。著書に *The "Fuero Militar" in New Spain* (1957) がある。ラテン・アメリカ諸国における軍隊の役割はとくに重要である。多くの国で独立をかちとり新しい国家を創設するのに軍隊は直接貢献したし，また新しい国家の指導者は軍隊から多く輩出した。一方インディオ等の地方住民は兵隊にとられることによってはじめて地方の生活環境からきり離され，国家というものの存在に接し国民としての意識に目覚める。兵役を離れると多くの者が都市のプロレタリアへ吸収されるが，村へ帰った者はそこで「変化」の担い手となる。下層の出身の者でも軍隊を通じて出世できるため軍隊は歴史的にみて伝統的な社会階層の障壁をとり払う機会を提供してきたといえる。次に重要なのが政治集団としての軍隊の役割である。ラテン・アメリカの独立の時期に軍隊の果たした役割はすでに述べたが，独立達成後国の基本的な政治形態が定まってから19世紀および20世紀初期における軍隊の政治活動は，主として「体制擁護」の立場に立つものであった。しかし近年の社会革命はこの状況を変えた。編者の言葉によれば「19世紀においては軍人は国家意志に尽すことを宣言したが，今日においてかれらは国家意志の内容が何であるかをまず明らかにしなければならない」のである。中産階級，産業資本家，労働者，知識人等新たな社会勢力の登場によって社会が多元化するに伴い軍隊の政治的重要度は低下したとみるむきもあるが，今日のラテン・アメリカのように社会経済上の緊張がしばしば民主政体を脅かすようなところでは軍隊のもつ意味をなお過小評価できない。

「大学生」の章を担当する K. H. Silvert は Dartmouth College 教授で専攻は政体論，著書に *The Conflict Society: Reaction and Revolution in Latin America* (1961) がある。一般の印象ではラテン・アメリカの大学生というと急進的で反政府運動の主力のように考えられるが，実際に現地の学生に接し調査した結果に基づいて Silvert は言う。ラテン・アメリカの大学生はほとんど上流あるいは中流上層の子弟であり，大学を通じて社会のエリート・コースへの資格を得る。かれらは「変化」よりも伝統維持の側に傾く。学生の政治活動が実際的な効果をもつのはよりおくれた国々，たとえばニカラグア，ハイチ，パラグアイ等であり，社会が複雑化し多くの利益集団が存在するような国々では学生の政治的な力は低下する。ブラジル，メキシコ，アルゼンチン，チリ，ウルグアイ，コスタリカ等が後者にはいる。

III

以上本書の第1章から第8章までの大づかみな内容を紹介した。筆者の専攻や興味，理解のていどなどによって紹介の密度にかなりの差のでたことは否めない。最初に述べたように本書は今日のラテン・アメリカで刻々と起こりつつある「変化」とそれを抑制し過去を「持続」させようとする勢力を，その担い手としての人間集団の側面から考察することである。おのおの専門の異なる学者が各章を分担して執筆しているが，十分な準備と共同討議を経た後の執筆であるので上記の共通の視点が失われることなくその意味で成功している。近年のラテン・アメリカの諸「変化」に対するアメリカの関心は非常に高く，これらの「変化」を理解しようという努力の一つの産物が本書である。この意味で本書は前記 John J. Johnson の *Politlcal Change in LatinAmerica* や Council on Foreign Relations, *Social Change in Latin America Today: Its Implications for United States Policy* (1960) 等に続くものと考えられる。この2書に比べて本書は「変化」の主体である「人間集団」に視点を据えて分析しているところがユニークである。ラテン・アメリカに対する日本人の関心はまだまだ薄いが，この地域に対する興味を呼びさます意味で本書は上記2書とともに専門のいかんを問わず読まれていい本だと思う。

一つの疑問は「ラテン・アメリカ」という広義のとらえ方で，どれだけ問題の本質に迫れるかということである。この点に関して本書の第9章で R. P. Dore は「ラテン・アメリカの研究者は個々の国の専門家であるよりは Latin Americanist である。その社会は多くの点で類似しているため，その差異を調べることによりどういう条件が組み合わされると何が起こるかという一般化へ導くことができる。かくしてラテン・アメリカは社会科学にとって将来性のあるフィールドを提供している」と肯定的であるが，はたしてそうとばかり言えるだろうか。ラテン・アメリカ研究の将来の方向として検討されるべき問題は残る。

IV

最後に本書は「ラテン・アメリカと日本の比較」とい

う1章を設け，これを『都市の日本人』(1958)，『日本の農地改革』(1959) 等の著書でわれわれになじみの深い R. P. Dore が執筆している。この小論は二つの部分に分かれ，前半はラテン・アメリカとアジア(とくに日本)を研究領域とする外国（とくにアメリカ）の学者の研究状況の比較，後半はラテン・アメリカと日本の近代化の比較を論じている。Dore によればラテン・アメリカ研究に関しては地元の学者とアメリカの学者との間に研究上のアプローチの差異，基本的なもののみかたの差異というものが日本研究の場合よりもずっと小さい。しかしこのことはただちにラテン・アメリカの学者とアメリカの学者との共同研究が容易だということを意味しない。ラテン・アメリカの学者のもつ哲学的，規範的な偏りとアメリカの学者のプラグマティックな偏りとの間に橋を渡すことはむずかしい。ラテン・アメリカの学者が自らの知的遺産に誇りをもつのに対して日本の歴史学者，社会科学者はその知的遺産を捨てて西欧への同化を目指した。これを Dore は「両者が川の真中で出合うよりも一方が川をとび越えるほうがやさしい」という比喩で表わしている。もう一つアメリカの学者のラテン・アメリカ研究はラテン・アメリカとアメリカとの政治経済上の密接な関係ゆえにかえってむずかしい局面に立っていると指摘する。今日アメリカがラテン・アメリカに対してもつ主たる関心は，ラテン・アメリカがいかにして共産主義の脅威を免れ，アメリカに友好的でありアメリカの企業投資を歓迎するかということである。一方ラテン・アメリカ研究者はその地域に住みついて住民と親しく生活をともにするにしたがい，アメリカや西側にとって何が有利かということよりもその地域の発展はどうあるべきかという観点から問題を設定するようになるからだ。Dore はアメリカの中国研究が政治的な圧力により，中共に対して同情的な見解を排して特定のペキノロジーに後退してしまった弊を顧み，ラテン・アメリカ研究においてそのようなことが起こらないようにと願っている。

つぎにこの論の主部をなすラテン・アメリカと日本の近代化の比較であるが，Dore はラテン・アメリカに比して日本のほうに近代化にとって有利な条件がいくつか存在したと指摘する。その最も重要な点として日本が文化的に等質的な存在でありかつその文化が外国から特異なものであることをあげる。日本の文化的境界は政治上の国境と一致する。ラテン・アメリカ各国については厳密な文化的国境を引くことが困難なばかりか共通のラテン・アメリカ文化というものをもっており，さらにヨーロッパ文化を背景にもち広い意味での西欧文化の圏内にある。日本では民族国家としての統一と日本文化の孤立性の意識 (sense of separateness) が国家意識の成長のために役だった。この孤立性の意識と表裏をなすものとして西欧からの輸入文化に対する先鋭な認識(sharpened awareness)があった。一方ラテン・アメリカでは近代的な技術は個々の技術としてはいってきたのであって西欧の文化体系に対する認識という問題は起こらない。

Dore の見解によると日本の近代史は「変化」を求める革新主義と伝統主義の消長の歴史であるが，社会関係の面で伝統的な要素を維持再編成したことがかえって国の経済発展を助長した。日本は工業化と教育の普及が進んで民主主義的な諸制度が定着するような社会的基盤ができるまで自由主義，民主主義の導入を延期した。これに対してラテン・アメリカ諸国では早熟の政治的発展，資本主義の発達した段階での産物である福祉国家の思想が工業化以前の社会と結びつき，経済発展に必要な資源を社会福祉＝消費のほうへまわしてしまった。経済発展を社会福祉に優先させる日本の場合と対照的である。もう一つ社会の上層に伝統的な地主階級が存在したという点でラテン・アメリカは日本と異なる。日本では近世において封建領主と土地の結びつきの弱化，武士階級の非地主化，官僚化が行なわれた。近年の地主階級の多くは富裕農民が転化したものである。日本では工業化以前に新しい支配階級として下層武士出身の官僚が古い地主階級にとって代わった。これら官僚は古い土地所有者の価値観と異なる価値観を有する。土地所有者層を排除したことは日本の工業化にとって有利な条件となった。その反対にラテン・アメリカでは経済社会の発展の結果として新しい職業グループの中産階級が成立したのであって，それらは現存の上層の土地所有者と勢力を分けあいしだいに併合するようになり，前者は後者の価値観をとるようになる。

このように Dore はラテン・アメリリカと比較して日本の近代化を有利に導いた条件をいくつかあげている。この章は，多くの問題を提起していて最も興味深く読めた。しかし本書の中心課題である「ラテン・アメリカ」の「持続と変化」とはややずれて，Dore 自身も言うように「日本研究者のラテン・アメリカ雑感」あるいは「ラテン・アメリカの諸事実と照らし合わせて日本の近代化を再検討する」といったものである。

（海外派遣員　石井　章）
―― 在メキシコ・シティ ――